

日中友好新聞

府連通信

2013年7月号
日本中国友好協会大阪府連合会
〒530-0013
大阪市北区
茶屋町10-6
阪急北ビル4階
TEL06-6372-8131
050-3413-6491
FAX06-6372-8132
郵便振替口座
00970-5-8978
E-mail:jcfa@j
t8.so-net.ne.jp
ホームページ
http://www005.u
pp.so-net.ne.jp
/jcfaosaka/

中国研究会八月からスタート 第一期シリーズ中国の体制を考える

二月に行われた大阪府連学習

講演会は大盛況でしたが、その際三〇名を超える方々から多様な鋭い質問が文書で出されてお

ります。このような高い関心に定員は先着順十五名です。

田中仁教授の講演を紹介

六月の学習講演会「日中関係の転機をどうとらえ、いかに再構築するか」と田端誠史さんのコメントを、山本恒人さんが二頁に紹介されています。

東大阪市で漫画展

平和のための東大阪戦争展のメイン企画の一つとして、漫画展「中国からの引き揚げ」少年

八月の両日、東大阪市民会館（近鉄奈良線永和駅前）で開催されます。東大阪支部は大阪府連手持ちの資料も提供し、実行委員のメンバーとして参加しています。二八日午後一時半から、西谷文和さんとアフガン留学生との対談も企画されています。



大明寺の鑑真和尚の揚州にも行きます。ぜひ多くの方が、参加されたいです。ぜひ多くの方が、参加されたいです。ぜひ多くの方が、参加されたいです。

十月に平和の旅へ 南京・鎮江・上海

十月十一日～十五日、「南京・揚州・鎮江・上海」平和の旅を実施いたします。

南京虐殺を否定する反動的な動きのあるなかで、記念館を訪れ、中国国民への残虐行為の事実を、現地で学ぶことは重要で

中国研究会
第1期シリーズ
中国の体制を考える
8月25日(日)
午後2時～5時
大阪府連 新事務所
205号室です

カワセミでうちわを創る きりえ西支部教室

六月十九日西支部六月行事で切り口がギザギの「きりえ」教室に友人と参加になりました。指が曲がっても



とに戻らないほど力が入り、なかなかかどらず疲れ果ててため息が。「イラチ」の根性が丸出しになって、思わずハサミでチョキチョキやっていると、きりえの裏に貼り付けました。(裏の方が美しい!) 次回も是非、きりえに挑戦してみたいです。平松さんありがとうございました。(H)



背後から「ハサミで切るかあ?」のあきれ声、すみませう。三時間の悪戦苦闘の結果「あわやカラスか!」の心配も裏から色紙を貼ってみると、結構美しく仕上がったのでひと安心です。

名人伊藤さんの「抜

大阪府連事務所移転しました

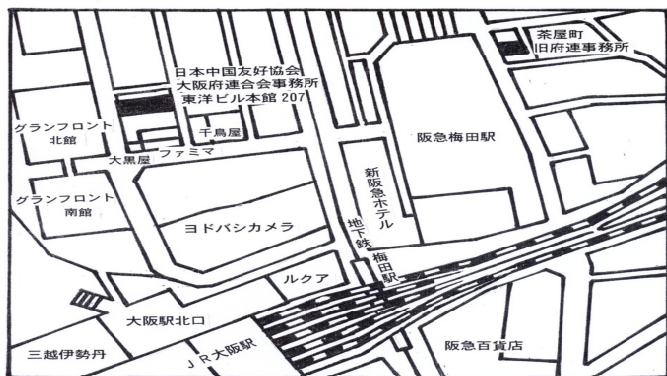
大阪府連合会事務所が6月24日移転しました。

移転先は〒530-0012 大阪市北区芝田2-3-19 東洋ビル本館207号室です。

中国語教室は205・305号室です。

電話・FAX・メールアドレスは変わりません。

連絡先: 大阪府連06-6372-8131



日中関係の転機をどうとらえ、いかに

再構築するか 大阪大学法学研究科教授 田中 仁

中国革命を相対視する

第一のポイントは、中国革命「感」が拮抗する時期です。この（中華人民共和国成立）を「相対化」する、という視点の提起にあたります。

戦後五〇年という区切りは、日本社会にアジア認識をめぐる内省を求めていることを田中先生は次のように示しました。

①「衆議院本会議での『侵略的行為反省』決議がギリギリで採択。村山首相による歴史的な反省と陳謝の、談話。」

②「このような動きは、戦争責任をめぐってメディア空間で、戦後の日本は加害者意識のきわめて薄い人間を量産し、アジアへの『謝罪』や『反省』に対してきわめて鈍感になってしまった」として、「国家や国民の對外責任の連続性」を認識すること

第二のポイントは、先ず、内閣府の世論調査での日本国民の対中意識の変遷を直視する点です。「親中感」は1980年の78.6%から2012年の18.0%に減少、

「嫌中感」は同14.7%から同80.6%に激増しています。1978-88年が「親中感」多数期、1989-2003年が両者拮抗期、2004年以降「嫌中感」多数期。田中先生が

との間にも大きな攻防をもたらすものとなったと指摘します。

①『人民日報』は「抗日戦争の歴史を忘却してはならず改ざんしてはならない。近年日本の閣僚を含む一部の人物が中国侵略の歴史を否認しファシズムを免罪していることは中国人民の感情とアジア・世界の人民の感情を著しく傷つけた」と強調したうえで、それと並べて「李登輝が民族の大義を顧みず祖国分裂の行動を行っていることは決して容認できない」と非難しました（九月三日）。

党の政権奪回にいたる1980年代半ば以降の台湾政治の展開が台湾アイデンティティの変容を伴っていたことです。アイデンティティの指標（台湾・政治大学選挙研究センター）は、自己認識「台湾人」、「台湾人かつ中国人」、「中国人」、「無回答」

の四つです。起点の1983年序列は「台湾人かつ中国人」、「中国人」、「台湾人」、「無回答」

です。1983年に「台湾人」が第二順位となり急上昇、2008年「台湾人」（12年には54.3%）、

「台湾人かつ中国人」、「中国人」、「無回答」へと逆転の構図が固まりました。

辛亥革命の「共和と民権」

第四のポイントは、第一と関わりますが、私どもの前にある中国とは、統一をめぐる台湾で

「この中華民族の完全な主権と一個の政治実態は掛け値なしのものである」と宣言しました。

日本の①②両者と中国の①②両者のそれぞれ相容れたい対立と攻防が、日中関係をめぐる日本国民の「親中感」と「嫌中感」との拮抗に深く影響しているという示唆は、大変興味深いものです。

台湾の民主化とアイデンティティ

第三のポイントは、總統直接選挙から政権交代、さらに国民

問題が、これまでの往來の拡大と深化によって育んできた相互の信頼・依存関係を棄損しつつある状況の中で、これからの日中関係を考えるとき、日中双方にこのような棄損を招く要因が存在し、しかもその要因が増殖していることを直視しなければなりません。これを日中関係そのものに内在するリスクととらえ、このリスクを管理できるような視点と手法が求められているのです。

コメント（田端誠史氏）

田中仁先生の講演に対して、「日頃聞けない台湾の情報を含め多様な視点を紹介され、私どもの友好運動が紆余曲折を経て必ずや統一に向かう大陸と台湾を視野に収める運動であること

を私自身は痛感いたしました。先生のお話は何かの結論を提示するというよりは、考える素材を豊富に提供されるものです。

国民の感情が大きく揺れる日中関係にあつては、『嫌中感情』の除去とともに新しい発想や方法が求められているように思います。日中関係の再構築は双方の国民を土台とした強固なものとしなければなりません。両国民の多面的な生身の交流の発展を期待しています」とコメントされました。（文責 山本恒人）

日中国交正常化四十周年にあたる2012年に起こった尖閣

問題が、これまでの往來の拡大と深化によって育んできた相互の信頼・依存関係を棄損しつつある状況の中で、これからの日中関係を考えるとき、日中双方にこのような棄損を招く要因が存在し、しかもその要因が増殖していることを直視しなければなりません。これを日中関係そのものに内在するリスクととらえ、このリスクを管理できるような視点と手法が求められているのです。

コメント（田端誠史氏）

田中仁先生の講演に対して、「日頃聞けない台湾の情報を含め多様な視点を紹介され、私どもの友好運動が紆余曲折を経て必ずや統一に向かう大陸と台湾を視野に収める運動であること

を私自身は痛感いたしました。先生のお話は何かの結論を提示するというよりは、考える素材を豊富に提供されるものです。

国民の感情が大きく揺れる日中関係にあつては、『嫌中感情』の除去とともに新しい発想や方法が求められているように思います。日中関係の再構築は双方の国民を土台とした強固なものとしなければなりません。両国民の多面的な生身の交流の発展を期待しています」とコメントされました。（文責 山本恒人）

日中国交正常化四十周年にあたる2012年に起こった尖閣

問題が、これまでの往來の拡大と深化によって育んできた相互の信頼・依存関係を棄損しつつある状況の中で、これからの日中関係を考えるとき、日中双方にこのような棄損を招く要因が存在し、しかもその要因が増殖していることを直視しなければなりません。これを日中関係そのものに内在するリスクととらえ、このリスクを管理できるような視点と手法が求められているのです。

コメント（田端誠史氏）

田中仁先生の講演に対して、「日頃聞けない台湾の情報を含め多様な視点を紹介され、私どもの友好運動が紆余曲折を経て必ずや統一に向かう大陸と台湾を視野に収める運動であること

を私自身は痛感いたしました。先生のお話は何かの結論を提示するというよりは、考える素材を豊富に提供されるものです。

国民の感情が大きく揺れる日中関係にあつては、『嫌中感情』の除去とともに新しい発想や方法が求められているように思います。日中関係の再構築は双方の国民を土台とした強固なものとしなければなりません。両国民の多面的な生身の交流の発展を期待しています」とコメントされました。（文責 山本恒人）

日中国交正常化四十周年にあたる2012年に起こった尖閣

問題が、これまでの往來の拡大と深化によって育んできた相互の信頼・依存関係を棄損しつつある状況の中で、これからの日中関係を考えるとき、日中双方にこのような棄損を招く要因が存在し、しかもその要因が増殖していることを直視しなければなりません。これを日中関係そのものに内在するリスクととらえ、このリスクを管理できるような視点と手法が求められているのです。

コメント（田端誠史氏）

田中仁先生の講演に対して、「日頃聞けない台湾の情報を含め多様な視点を紹介され、私どもの友好運動が紆余曲折を経て必ずや統一に向かう大陸と台湾を視野に収める運動であること

を私自身は痛感いたしました。先生のお話は何かの結論を提示するというよりは、考える素材を豊富に提供されるものです。

国民の感情が大きく揺れる日中関係にあつては、『嫌中感情』の除去とともに新しい発想や方法が求められているように思います。日中関係の再構築は双方の国民を土台とした強固なものとしなければなりません。両国民の多面的な生身の交流の発展を期待しています」とコメントされました。（文責 山本恒人）